

## 「夜明け前」なのか？

### —エネルギー政策の逆走

横山由美子（新潟YWCA会長）

東京電力福島第一原発の事故から15年が経過します。そしてまだ終わっていません。事故後、〈原子力発電への依存度をできる限り低減させる〉とエネルギー政策をシフトしたにもかかわらず、2025年2月に出された第7次エネルギー基本計画では、前述の文言は消されて、〈再稼働の加速に向け官民を挙げて取り組むこと〉と変えられました。

「エネルギー基本計画」は3年ごとに見直され、日本のエネルギーに関するすべての政策の土台となるものです。

新潟の柏崎刈羽原発6号機の再稼働は、知事が公約違反を強行し容認となりました。1月21日に14年ぶりに再稼働しましたが、直後に警報が鳴り、およそ29時間後に原子炉を止め原因を調べています。恐ろしい事態です。

原子力発電は、そもそもON/OFFを瞬時にするのは得意ではありません。止めるには原子炉の中に制御棒205本を差し込み、核分裂をストップするという仕組みです。恐ろしい事態の一つには、細長い制御棒がまっすぐに挿入できるかどうか心もとなく、柏崎刈羽原発の運転員の41パーセントが運転未経験であるということがあります。

さて、気候危機は世界中の人々の暮らしと命に直結し、地球市民としての覚悟と行動が求められています。パリ協定で気温上昇を1.5度に抑える約束が基になっていて、日本も2050年には、温室効果ガスをゼロにすると目標を掲げているのです。

それにしても、脱炭素のために原発再稼働が推し進められることに大きな違和感を覚えます。原発がクリーンで安全という神話が、日本ではゾンビのようによみがえっています。

このエネルギー基本計画は、世界の潮流である「再エネ3倍」の急速な普及に比べて目標値の設定がとても低いのです。また、太陽光・風力の発電コストが化石燃料を下回る状況と比較した場合も転換するスピードが遅いと言われています。なんとも周回遅れの日本です。

「世界では、再生可能エネルギーと蓄電池のコスト革命と成長は著しく、課題は「電力不足」ではなく“ありあまる電気”の活用へと移った」（『Ei 革命』 飯田哲也著より）という「電気が足りない」というウソを暴いた本が刊行されています。世界の潮流に逆走していることがわかります。

新潟では、柏崎刈羽原発の再稼働について、新潟のことは新潟県民に決めさせてほしいと声を上げています。そして新潟県民投票を実現するために必要な条令をつくってほしいとの署名活動を展開しました。草の根の市民の力で沿道に出かけたり、集会に駆け付けたりして、2 カ月間で 15 万筆を超える署名（有効数 14 万 3196 筆）を県に提出。県議会に議論を尽くしてほしいと願い、県庁を人々が取り囲む「人間の鎖」（昨年 11/25）を実施しました。全国から 1200 人以上の同志が結集し大成功。あちこちから「ありがとう」「お疲れさま」の声が交差し、清々しさと信頼が呼び起されました。

しかし、たった 3 日間の臨時議会で一蹴されたのです。残念な結果に憤りを覚えました。民主主義・住民自治の大切さを胸に刻むことになりました。その後も、参議院会館で院内集会を開くなど、微力ですができることを続けています。

これまでを振り返って思うことは、原発は国策であり、巨大な力が働いているということです。原発がなぜ福島や新潟にあるのか 一つくられた電気は関東圏で使われているのに。国家システムの中で犠牲を強いられているのです。

日本 YWCA が 1970 年に原発を含めた「核」否定の思想に立つと決めたことは、ヒロシマ・ナガサキの証言や遺構や『ひろしまを考える旅』に参加された人々からの学びがあったからだ と確信しています。「誤った文明の行きつく先を見た」とし、核と人類は共存できないと言い切った教えを活かして活動したいと思います。

日に日に世界が悪くなっているこの時に、私たちがなすべきことはたくさんあります。夜明け前が一番暗いのであれば、夜明けは近いと希望をもって、共に歩みを進めたいと願います。あらゆる差別のない、一人ひとりを大切にする社会を実現していきましょう。